

# 湘南藤沢学会「研究助成基金」成果報告書

慶應義塾大学 総合政策学部 3年

長谷部葉子研究会 コンゴ民主共和国 ACADEX 小学校プロジェクト所属

太田 泰葉

## 活動名称：

開発途上国における女性の社会進出と教育を受けた後の意識変容についての研究  
～コンゴ民主共和国 NGO 団体アプロフェッドを対象として～

## 活動日時：

2016年8月7日～8月26日

## 実施場所：

コンゴ民主共和国首都キンシャサ NGO 団体アプロフェッド

## 1. 活動背景

---

コンゴ民主共和国では、紛争に巻き込まれ性暴力を受けた女性が20万人以上にのぼる。さらに性暴力を受けたことがわかるとひどい差別を受けるため、多くの女性は被害を打ち明けられずにいる。紛争地では、性暴力が戦闘手段の1つとして組織的に行われている。(ユニセフ本部 HP 参照) こうした恵まれない環境に育った女性や子どもたちのために、現地に暮らす女性自身が強い意志を持って経営し、活動しているケースは珍しい。我々長谷部葉子研究会コンゴプロジェクトは2008年より活動を開始し、教育チームとして小学校のカリキュラム作りやワークショップ、国立教員大学やプロテスタント大学院との提携、そして今年新たに NGO 団体アプロフェッドにフィールドを展開している。

## 2. 活動目的

---

本研究は、アプロフェッドでの滞在型調査を実施するものである。問題意識を持って行動する経営者 Cécile KITAPINDU KIANGALA 氏のモチベーション調査ならびにアプロフェッドに通う女性達の意識調査をすることで、現地の人たちのオーナーシップを尊重した日本とのコラボレーションの可能性の模索をし、長期的には同じような問題を抱える国や地域にとってアプロフェッドがモデルケースとなることを目的としている。

### 3. 活動成果

---

本研究は、主に2つの活動を行った。

#### (1) 地域の女性とのセッション

8月16日に、現地の女性（主に母親）12名と共に、ジェンダーについてのセッションを行った。コンゴと日本の女性や家族構成などの情報共有をした後、ワークライフバランスや、学校へ行く機会などについて意見交換をした。成果として、私たちが考えているほど、現地の女性達はジェンダーのギャップを感じていないということが第一としてわかった。私たち日本人のいう「社会進出」と、彼女たちのいう「社会進出」は同一ではないが、ワークショップなどを通じて女性としての幸せの形を作り上げることができる可能性を感じた。

#### (2) 大学院に通う若者たちのセッション

同月18日には、大学院に通う若者たちとのセッションを行った。最近では女性の方が職を得やすらしく、その理由が男性より女性のほうが「コントロール」しやすいというものであった。そのことに対し、現地の男性・女性ともに違和感を感じていないため、その状態の変化のために教育チームの活動の可能性を感じた。トピックを限定しなかったため、深い議論ができず、次回への課題となった。

### 4. 今後の活動へ向けて

---

今回初めてのアプロフェッド滞在であったため、まずは関係性構築を第一に考え、可能な限りの活動を行った。次回の渡航では、実際にトピックを限定したセッションを行ったり、意識調査アンケートを実施したりすることで、さらなる研究へと臨む所存である。



NGOアプロフェッドの教育施設



地域女性とのセッション